

ンケートから、科名が受診者に与える影響を調査し、内面的な偏見による抵抗感という視点から分析したところ、診療科名変更の効果と受診者の特徴について知見を得たので報告する。

II. 目的

診療科名の変更が及ぼす効果と、受診者の特徴についての知見を得ることで、新しい時代の外来精神看護のスキル向上への寄与を目的とする。

III. 研究方法

1. 初診患者動向調査

2002～2004年度の初診患者を年度ごとに集計・比較する。

2. アンケート調査

1) 調査方法：2003年7月～9月に受診した患者のうち、初診患者80名（全数）と、無作為に抽出された再診患者100名に個別自記式質問紙法を施行した。

2) 分析方法：返答と年齢・性別・診断名、再診患者は通院期間・頻度を加え、すべての条件による返答の差が有るか確認した。有意差検定はX²検定で行った。

IV. 結果

1. 初診患者数の動向

2002年度301人、2003年度346人、2004年度414人と急増している。紹介元の内訳は、院内の対診と紹介なしが増加し、他院等からの紹介がむしろ減少した。

2. アンケート

1) メンタルヘルス科を知る手段：他科からの紹介が83%と圧倒的多数を占めている。以前から知っているという意見は僅か9%と少なく、病院の知名度と考え合わせると新しい科として認識されている可能性がある。

2) メンタルヘルス科への受診に対する抵抗感：メンタルヘルス科は受診しにくいと感じている人は31%で、その中の7%は強く感じている。初診・再診間に有意差はなく、再診患者の通院年数による比較においても有意差は見られなかった。この抵抗感は、受診を繰り返してもほとんど軽減されず、普遍的に存在している。

3) 精神科とメンタルヘルス科の差：精神科とメンタルヘルス科という科名では、63%の人が後者の方が受診しやすいと感じており、科名による抵抗感の違いが見られた。さらに、初診患者の方が科名に対するこだわりが有意に強い。

口述発表 6

精神科外来の診療科名変更が与える 受診の抵抗感への影響

村上 成明¹⁾

1) 青森県立中央病院

Key Words：①抵抗 ②偏見 ③診療科名変更
④精神科

I. はじめに

総合病院を受診する患者の中には、精神的な症状を呈する患者もまれではないが、それを担う“精神科”には根強い偏見が存在し、受診者は少なからず心理的抵抗（以下、抵抗感とする）を抱く。精神科に関しては、人の目に触れる機会が多い分入院よりも外来治療の方が、ストレスが強いとされる。また、抵抗感の要因となる“偏見”は、社会的な価値観の影響と共に、他者の評価の予測から生じる内面的な偏見の影響が大きい。当院精神科外来は、2003年度より診療科名をメンタルヘルス科に変更した。その後、受診者数は増加したが、受診者に及ぼした具体的な影響は不明のままであった。そこで、当時のア

- 4) 科名による受診行動の変化：もしも精神科だったら受診しなかったという初診患者は16%、科名変更によって治療意欲が増したという再診患者は15%存在し、こう返答した患者はいずれも科名に対して有意に強いこだわりを持っていた。
- 5) 科名の意味の理解と使いやすさ：メンタルヘルスの意味を明確に理解している人は21%に過ぎないが、名称の使いやすさの質問では83%の人が肯定的であり、意味の理解の如何に関わらず科名は受容されていると言える。

V. 考察

1. 受診に対する抵抗感が軽減する

メンタルヘルス科は精神科に比べて抵抗感が弱い。それは新しい科としての認識の影響も考えられる。特に初診患者のこだわりが強いのは、科名以外の判断要因が極めて少なく、科名に抱く印象の影響が大きいと考えられる。また、この抵抗感の軽減は、他科の医療者の紹介のしやすさにもつながる。

2. 受診に対する積極的な姿勢・態度が期待できる

抵抗感の軽減は、患者の治療に対する姿勢や態度にも影響を与えている。紹介なしの患者の増加は自発的な受診の増加と考えられ、精神科という科名では受診しなかった人々が受診し、治療意欲の向上も認められた。裏を返せば、偏見は現に治療の妨げとなっており、偏見への対処努力は治療を促すと言える。

3. 言葉としての道具的機能の低下は許容されている

カタカナ英語表記で意味はぼかされ、抵抗感を減らす一方で言葉の道具的機能は低下するが、多くの患者がその不利を許容し、偏見からの開放という利点を選択している。これは、自らの使い易さよりも社会からの認知を重視していることを示す。

4. 認識よりも行動に抵抗が表れる

受診に強い抵抗感を抱く7%に対し、おそらく受診しなかった人は16%であり、抵抗感は「認識」よりも、「行動や態度」に表れる方が多いことを示唆している。偏見は常識という自然な中に存在し、無意識的なものである。当科受診者は自らの内面にある偏見に、自ら無意識のうちに責められ葛藤状態にあると考えられる。

5. 初診時の印象が大切である

治療期間による抵抗感の変化がないことから、初診時の印象がその後の抵抗感に大きく関係している可能性が高い。初診時にその科の印象が決まり、その後治療意欲にまで影響を与えるが、一般に看護師は初診患者への関わりが弱いとの指摘もあり、努め

て初診患者とのつながりを持ち、抵抗感に配慮した対応が重要である。

VI. 文献

- ・ 齊藤文男, 村上成明：精神科外来における診療科名変更の効果, 青森県立中央病院医誌 Vol. 49 No. 1, 2004.
- ・ 要田洋江：障害者差別の社会学, 岩波書店, 1999.
- ・ 田原明夫：こころ病む人を支えるコツ, 解放出版社, p169, 1996.
- ・ 白石大介：精神障害者への偏見とステイグマ, 中央法規出版, 1994.